

## 1. 登山記録

はなく、南面ドゥードコーラ側より、1983年弘前大学ネパール合同隊によって初登頂された。その後、ネパール政府の名称変更により、この山はネムジュンとなり、その北方に新たなヒムルンヒマールが出現し、1992年、北海道大学隊が西面プーコーラ側より初登頂した。この時、初めて、プーコーラ源流の山々が明らかにされたのであった。

私達信州大学山岳会と学士山岳会は、1971年アンナプルナⅡ峰(7,937m)の遠征以来、1978年ジュティポフラニ(6,850m)とニルギリ南峰(6,839m)の2つの初登頂をはじめ、多くの海外登山を行ってきた。しかし、1982年のアンナプルナⅡ峰南壁と、ガネッシュヒマールⅢ峰(7,111m)以降、組織だった活動はしていなかった。その後10年たち、実動メンバーもふえ、信大として、大きな遠征隊を出したいという機運が高まってきた。目標は、1994年秋、アンナプルナⅡ峰北面に新ルートを開くことである。そして実行委員会の強力なバックアップをうけて、1992年と1993年に偵察を行なった。しかし、1992年、信大の生んだヒマラヤニスト、二俣勇司をクラウン峰に喪い、予定ルートの危険性を勘案して、計画は中止と決定された。そして第2案として考えていたラトナチュリとギャジカンが、急浮上することになった。

ネパールで未踏峰の許可を取得するには、現地との合同が不可欠である。カトマンズでの交渉により、ネパール警察登山探検財団(以下NPMAF)との合同が決定し、1994年秋の実施にむけて、準備を進めていった。当初、2つの未踏峰を1度に登ってしまうという計画であったが、そううまくいくはずがなく、1994年1月、内務省より、ギャジカンのみ許可がおりた。また、正式の登山許可は、ネパールの閣議決定により下されるのであるが、なかなかおろさず、じりじりとした毎日を送らされた。準備のつごう上、6月末がタイムリミットである。そうしているうちに、肝心のネパール内閣が総辞職してしまい、絶望的となった。しかし、辞職直前の7月1日に、閣議で決定され、登山が実現した。こうして、あわただしく準備を行ない、8月20日と27日にわかれて、1994年ギャジカン登山隊はカトマンズへむかった。通常、ヒマラヤ遠征には、成否をわける山場が、必ずどこかにあるものだが、ギャジカンの場合は、出発前に山場があったと言える。一方ラトナチュリは、国境稜線上にあるため、許可取得は、さらに困難であった。ギャジカンでの実績と、多くの人達の努力により、許可がおりたのであった。

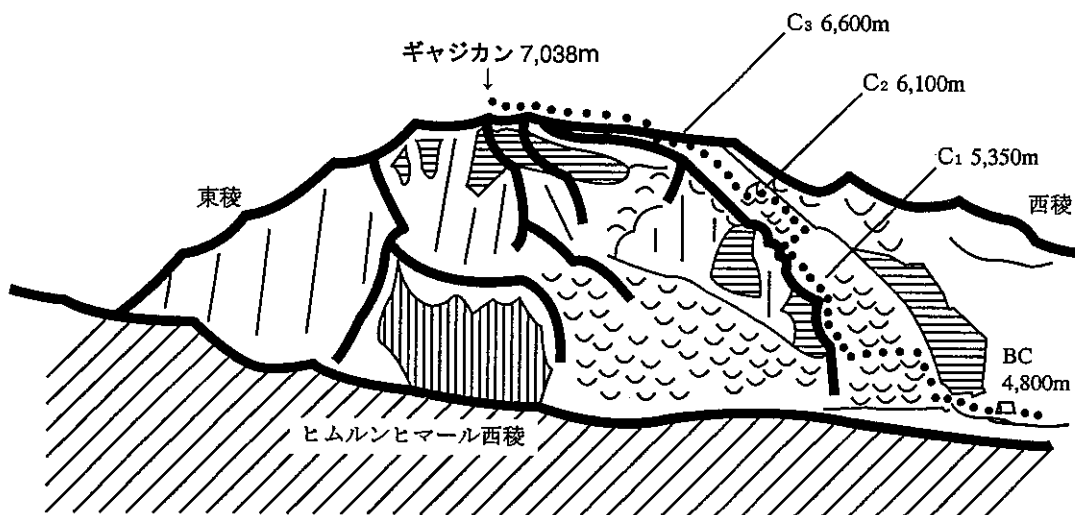
### ギャジカン初登頂(1994年秋)

9月19日、私達は、プーコーラ源流パングティ氷河左岸のアブレーションバレーに、ベースキャンプを建設した。標高4,800m。ベースキャンプから望むギャジカン北面は、圧倒的な大岩壁と、絶悪のアイスフォールを持ち、私達の力量では、手を出しがたい。西面はなだらかで長大な尾根となっているが、末端から延々と尾根をたどるのも大変そうであった。そこで、北面より、西稜上部に出られる唯一のルート、北西支稜にルートを取って、9月22日、登山活動を開始した。ちなみにギャジカン

## 1. 登山記録

は、通常のヒマラヤの山とは異なり、南面と西面がなだらかで、北面と東面が切れおちている。

北西支稜の下部は、アイスフォール帯となっている。その右岸、左岸とも、落石と雪崩の危険があったため、ルートは最初左岸のガラ場をつめ、途中でアイスフォールを左へトラバースした。7ピッチのルート工作で左岸へ到達し、氷河とのコンタクトラインぞいに4ピッチ岩のスラブを登る。さらにアイスクャップを登るとC1(5,350m)である。ここまでが技術的に核心部であった。C1より小プラトーと雪稜をたどり、今にも雪崩そうなスノードームを2つ越える。ここから迷路のようなクレバス帯を右へたどって、中間プラトーへぬけた。ここより上部プラトーへは、アイスフォールが立ちはだかっているが、右端にすべり台のような登路があり、6ピッチのルート工作で、C2(6,100m)に出た。C2より大クレバスをぬって進むと上部プラトーである。登るほどに上部プラトーはそのまま広大な山頂平原へとつづく。6,600m地点にアタックキャンプとなるC3を作った後、10月7日、1次アタック隊6名が初登頂に成功した。つづけて、10月10日と14日に2次・3次のアタックをかけ、登攀隊員17名全員の登頂に成功した。山頂は広大で、300mほど東に東峰があったため、一応登頂しておいた。標高は、本峰とほとんど変わらなかった。なお、この登山では固定ロープを33本使用した。また、9月20日にモンスーンが開けてから、連日晴天がつづき、登山期間1ヵ月の間に、降雪を見たのは1回だけであった。



ラトナチュリよりギヤジカン

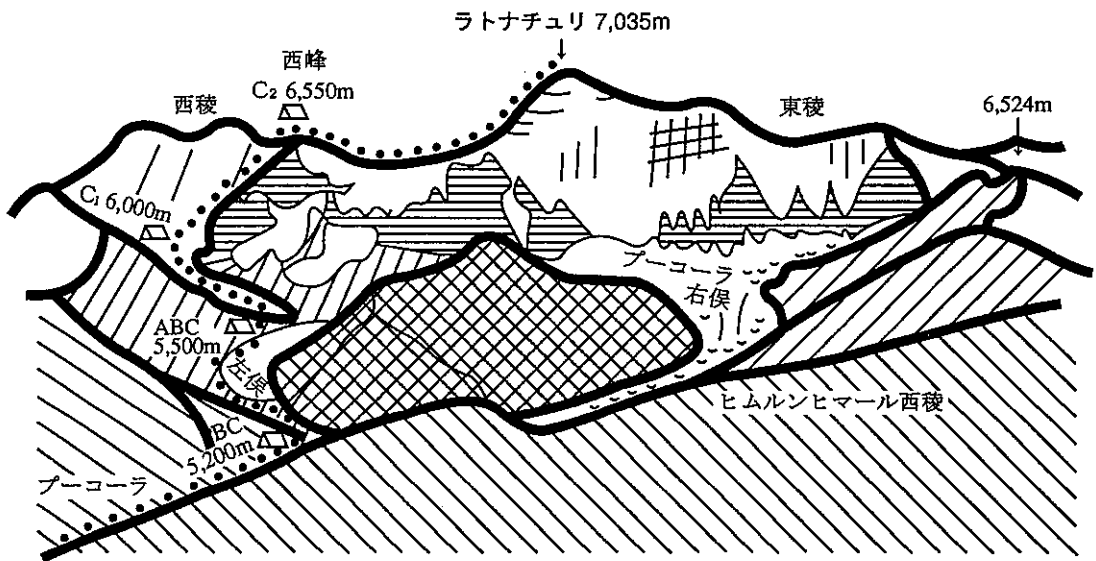
### ラトナチュリ初登頂 (1996年秋)

ラトナチュリは中国とネパールの国境稜線上に、東西に羽を広げたような山容を持っている。ネパール側の南壁は、アルパインスタイルで登るのに最適な傾斜となっているが、落石の危険があるため、極地法には適さない。そのため私達は西峰をこえて、本峰まで縦走するルートをとった。

9月20日、私達は、プーコーラ最源流5,200m地点にベースキャンプを建設した。ベースキャンプの

## 1. 登山記録

標高が高いため、4,200mのプーガオンと4,600mのパングティカルカに、順応用キャンプを設けて、メンバーの高所順化を計り、全メンバーがベースキャンプに集結したのは、9月25日であった。一方ベースキャンプからは、9月23日より登山活動を開始し、4日間で、ラトナチュリを望む5,500mのABCに、物資を荷上げた。ここから、ゆるやかな雪の斜面を登って、西峰の取り付きのプラトー(6,000m)にC1を作った。西峰(6,550m)はむかって、左側の雪稜を登り、19ピッチの固定ロープを張った。そのままアタック体制に入る予定であったが、10月4日、悪天がきたため、いったんベースキャンプに撤退した。天候の回復を待って、西峰の頂上から3ピッチ本峰側へ下った地点にC2(6,550m)を作り、10月5日、6人のメンバーでアタックをかけた。本峰の登りは30°程度の雪の斜面であったが、山頂まで標高差50mの地点で、固定ロープがたりなくなり、登頂を断念した。一部のメンバーだけなら、登頂できたと思うが、合同登山隊の性格上、許されないと判断した。3回目のアタックはもはや失敗は許されない。3人のアタッカーに、6人のサポーターをつけるという、過剰なまでの鉄壁の布陣を敷き、10月14日、1次アタック隊3名は2名のサポーターとともに初登頂に成功した。これによって、固定ロープのベタ張り状態が完成し、すかさず16日と18日に2次・3次のアタックをかけ、登攀隊員16名の全員登頂に成功した。山頂はせまく、中国側はなだらかな雪稜となっていた。今回の登山では45ピッチの固定ロープを使用した。支点はすべて、スノーバーであった。また、登山期間中、ギャジカンの時とは対称的に、しばしばモンスーンに逆もどりしてしまったような悪天にみまわれた。



ギャジカンよりラトナチュリ

### ネパール警察との合同登山について

今回の2つの登山は、許可取得の手段として、NPMAFとの合同登山を行なった。彼らは、隊長の

## 1. 登山記録

ラナ氏をはじめ、非常に友好的かつ気をつけてくれ、楽しい登山を過ごすことができた。カトマンズでは、梱包作業に警察学校の体育館を使わせていただき、キャラバン中は、現地警察の全面的な強力が得られた。また強力な警察無線で、ベースキャンプから、毎日カトマンズへ、直接交信ができるのも、心強かった。

一方、デメリットとして、登山の費用すべて日本側で負担しなくてはならないことが、あげられる。NPMAFメンバーの登山の力量は、ここ毎年高所登山を行ない、力をつけてきたとはいえ、まだ、クライミングシェルパの手助けが必要である。必然的に大きな登山隊となり、総費用がかさむことになる。

また、日本側にとっては趣味のヒマラヤでも、NPMAFにとっては、国家がかりのプロジェクトであり、登頂は至上命令である。日本メンバーにもNPMAFにも等しく登頂のチャンスを作り、より多くの登頂者を出すために、オーソドックスな極地法を取るようになった。

そのほか、生活習慣の違いや、登山に対する考え方の違いを尊重しなくてはならないのは、当然である。

### プーコーラ源流へのキャラバンについて

1992年の北大隊は、ナルコーラに入るために、標高5,200mのカンラを越えた。私達はギャジカン・ラトナチュリとともに、ナルコーラのゴルジュ帯を通過できたため、カンラを越えなくてすんだ。しかしギャジカンで12日、ラトナチュリで14日のキャラバンがかかった。キャラバンが長いのは、それだけで大変である。特に秋の遠征はモンスーン中にキャラバンを行なうため、川ぞいのルートは不安がつきまとう。実際、死亡事故をまのあたりにしたポーター達は、アッという間に逃げ帰ってしまい、現地で割高のポーターをやとうことになった。

また、最奥の村、プーガオンからは、ベースキャンプまで、毎日のように村人がきて、楽しく交流することができた。帰りのキャラバンは、彼らに、ヤリと馬を出してもらって行なった。普段は友好的な彼らであるが、こちらが本当にこまった時には、ここぞとばかりにタカられるので、十分な覚悟が必要である。よくあることであるが、ここの住民もまた、「困っている人を見たら、けとばして、身ぐるみはぎなさい。」と教育されてきたのであろう。ラトナチュリ登山隊の「山場」は、正に、帰りのキャラバンにおけるプーガオンの村人との戦いであった。またよくあることであるが、ネパール警察の御威光も、プーコーラの山奥まではまったくとどかないことも書き加えておく。

### 信州大学ネパール警察合同ギャジカン登山隊 1994 隊員構成

総隊長	山田 哲雄
総隊長代理	山下 泰弘
隊長	藤松 太一
副隊長	田辺 治
兼登攀隊長	

## 1. 登山記録

隊 員 三野 和哉, 中村 貴士, 中村 幸典, 小久保陽介, 長谷川聡貞,  
橋口 徹, 伊藤勇太郎

(ネパール側)

隊 長 G・B・ラナ

副 隊 長 S・B・カルキ

隊 員 G・B・ジョシ, R・K・シバコティ, P・B・カトリ

信州大学ネパール警察合同ラトナチュリ登山隊 1996 隊員構成

総 隊 長 野村 昌男

隊 長 渡部 光則

登 攀 隊 長 田辺 治

隊 員 金子 鉄男, 澤田 克彦, 内田 健一, 花谷 泰宏, 小林 茂幹

(ネパール側)

隊 長 G・B・ラナ

登 攀 隊 長 G・B・ジョシ

隊 員 R・K・シバコティ, S・B・アレ,

(信州大学ネパール警察合同隊)